

[ 優秀賞 ]

七尾 理絵子さんレビュー (秋田市)

書評対象図書

ガブリエル・ガルシア＝マルケス 著／鼓 直 訳『百年の孤独』(新潮文庫刊)

それでいいんだよ

本書のページを繰れば男たちが毎朝飲むブラック珈琲の香り、女たちが虫除けに衣装箱に入れているバジルの香りが鮮やかに立ち上る。南米コロンビアのカリブ海沿岸に住むホセ・アルカディオ・ブエンディアは妻ウルスラと共に新天地を求めて旅に出る。苦難の果てにたどり着いたマコンドという架空の地での一族六代にわたる歴史を描いたのが本書である。歴史と言っても短くかつ途方もないエピソードの集積であるが.....。

マコンドは初め二十軒ほどの寒村だったが時代と共に発展してゆく。ジプシーやアラビア商人、トルコ人がやって来る。教会も娼館も出来、ついには鉄道も敷設される。米国人が来てバナナプランテーションが始まる。その間にも内戦は止むことがない。

この小説は現実と超現実が混じり合っている。伝染性の不眠症やジプシーの持ち込んだ空飛ぶ絨毯などはまだ序の口。恐ろしいほどの美貌のレメディオスは突然昇天してしまう。しかしなにしろここはマコンド。「血のように鮮やかな菖蒲の花や金色の山椒魚」が見られる「原罪以前にさかのぼる湿気と沈黙の楽園」なのだ。何が起こっても不思議ではない。

この血筋には孤独で逃避的でありながら人の先に立って活動するという二面性を持った男が時々出現する。例えばアウレリャノ大佐。内戦に身を投じて三十二回も反乱を起こし革命軍総司令官にまでなる。しかし老後はその若き日と同様故郷の工房にこもって細工物を作り続ける。男たちがこんなふうなので一族の女たちは逞しい。例えばウルスラは飴細工の商いで屋敷を増築出来るほど稼ぎ、人の道を外れた孫には容赦なく鞭を振るう。そのうえ百歳をはるかに超える長生きなのだ。

この物語には周りの思惑を気にしたり、過去を悔やんだりする者は出てこない。皆濃くくっきりと生きては死んでゆく。しかし一人一人のエピソードがあまりにも破天荒なので無常感に浸っている暇が無い。作者は自分たち一族の氏神の物語を書いたかのようなでもある。そこに善悪はない。「与えられた命を全うすれば、それでいいんだよ。」という作者のメッセージがじわじわ伝わってくる。人の世には人の数だけ悩みがあるという。本書はそんな数々の悩みをありのままに肯定してくれているようだ。美しく複雑な唐草模様のようなこの物語。読み進むうちに少し心が軽くなるのを、きっとあなたも感じるだろう。